



第10回生 中村敦夫氏

国会議員・俳優・監督・脚本家・小説家・キャスター

東京外国語大学中退
俳優座養成所を経て入団('63)
ハワイ大学奨学生留学('65)
パークレイ滞在
俳優座退団('71)
「木枯らし紋次郎」主演('72)
(株)中村企画設立('76)
文筆活動開始
情報番組キャスターを務める
参議院選当選('98)
第10回ゴールデン・アロー賞
ブルー・リボン助演男優賞他

私は東京生まれだが、小中学校は福島県の平市（現いわき市）だった。

小学校へ入る前、東京の空襲がひどくなり、父の出身地へ避難した。

父は新聞記者だったが、勤務していた読売新聞の本社が爆撃されたので、戦後は地元の県紙に就職した。

東京育ちの母は、地方の生活が性に合わず、東京のきつかけを捜していた。

私が県立高校に入學して間もなく、母は一つの賭けに出た。私を東京

の高校に転校させ、帰京

の流れを作ろうと考えた。遠戚の家が目白にあり、私を下宿させてくれる話があった。

学区で高校を捜し、新宿高校と戸山高校が候補になった。どちらも当時の名だたる受験校で、転校試験は十倍の難関だった。二校を受験し、幸い両方に合格できた。どちらを選ぶかで多少迷ったが、結局新宿高校に決めた。その理由は、今思えばくだらないことだった。戸山高校の受験の日、私は履きかえるスリッパを持参せず、係の先生に小

言を言われた。それが気に喰わなかった。一方、新宿高校は、建物はひどく汚かったが、靴のまま

でOKだった。下駄箱がない学校というのが、妙にシャレたものに思えた。親類の家族と同居とは言え、初めて自分の家族と離れた生活は心細いものだった。田舎から出てきて、カルチャーショックもあった。

珍しくなかった。息もつけない競争は大きなストレスになった。そのうえ、思春期特有の哲学的な悩みや、学校では充たされない芸術への憧れなどで頭がおかしくなった。

追い討ちをかけるように、父が失職し、経済的困難が加わってきた。勉強をする意欲がなくなり、自分の存在の意味が分からなくなった。同級生たちは、何か目的をもって真つしぐらに進んでいるかのように見えた。二年生になって間もなく、私は競争からドロツ

プアウトした。授業をさぼり、御苑の塀をこえて、早々と弁当を片づけ、芝生に寝転がっていることが多くなった。放課後は、現在の三越デパートあたりにあった日活名画座に通い、洋画の名作を見続けた。五階か六階だったが、エレベーターもなく、細かい階段を登り降りしたことを覚えてい

る。今、ふり返っても、高校で何か重要なことを学んだとは思えない。私が魅きつけられていたのは、スクリーンで展開される人間模様や社会の様相だったような気がする。先生から、現役で東大は無理だと言われたので、受験科目の少ない東京外大を受けることにした。とにかく、浪人だけはしたくなかった。親や親戚のてまえ、形だけつけてしまえという気持ち

だった。大学へ行っても、結局は同じことで、途中から俳優になってしまった。その後、キャスターをやったり、小説を書いたりした挙句、今は国会議員をやっている。人生の脈絡はすべて独学で、私には学校はあまり意味がなかったようだ。

それでも、新宿高校出身だという人に会うと、なんとなく身内意識になるから不思議である。「議員になったんだから、同窓会に出なさい！」などと、すっかり忘れていた同級のオバサマたちから強要され、今頃になって時々顔を出すようになった。出席者から、私の高校時代の行状を聞かされ、びっくりしたりする。彼らは、結構私に関心をもっていてくれたのだ。